

平成 26 年度 全国私立中学高等学校

私立学校専門研修会

次世代リーダー育成部会

【実施報告】

***** 研究のねらい *****

「建学の精神をどう具現化するか」

少子化や経済不況の影響などにより、学校経営環境が著しく変化する中、学校が未来永劫的に存続・発展していくことは社会的な使命でもあり、そのためには、学校経営者には「変化を読み取り柔軟に対応する能力」、「的確な決断を下すための知識」が求められる。そのような中であっては、将来的に学校経営の舵取りを任されることになる経営後継者に求められる役割と責任は大きい。

本部会では、自校の建学の精神、歴史を深く理解した上で、これからの時代を見据え、自校と経営後継者自身の理想の将来像を描き出すための考え方や視点を学び、その実現に向けて教職員と連携し自律的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを習得する。また、現職の学校経営者が理想や現実を語り、その経験から得られた教訓などを次世代に伝えるとともに、関係者のネットワークづくりや情報交換の場とする。

本年度は、私学にとって永遠のテーマである「建学の精神をどう具現化するか」について考える。学校改革を加速させるためには、教育内容等のソフト面はもちろんのこと、教育環境等のハード面での充実は欠かせない。また、建学の精神に裏打ちされた確固たるビジョンなしに改革を成し遂げることはできない。今一度建学の精神に立ち戻り、教育内容や生徒の学習環境の中にどのようにビジョンを反映させていくかは、経営後継者に課せられた最大の使命と言える。

かつて私学の三大特色と言われた「男女別学教育」、「一貫教育」及び「宗教教育」は公立学校の私学化により現在では色褪せた感もあるが、今も尚これに拘り女子の一貫教育を貫く現職の学校経営者の考えを聞くとともに、完成したばかりの新たな教育施設を視察し、そこに込められた現職の学校経営者の思いやミッションスクールとしての経営方針などを聞くことを通して「建学の精神の具現化」へのヒントを探る。

◆ 会 期 ◆ 平成 26 年 11 月 7 日（金）～ 8 日（土）

◆ 会 場 ◆ 新横浜プリンスホテル
〒222-8533 神奈川県横浜市港北区新横浜 3-4（JR 東海道新幹線・新横浜駅徒歩 2 分）
☎ 045-471-1111

◆ 参加者数 ◆ 50 名（募集 50 名）

◆ 参加対象 ◆ A 次世代リーダー（次世代の理事長・校長等）を志す者
B ニューリーダー（新任の理事長・校長等）
C 次世代リーダーを育成する現職リーダー（現職の理事長・校長等）

◆ プログラム内容 ◆

① 講演

演題「私立学校の次世代リーダーに望むこと」

講師 實吉 幹夫 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長

實吉幹夫氏プロフィール

1943年東京都生まれ。学習院大学経済学部卒業後、長銀不動産株式会社（日本ランディック株式会社に営業譲渡）に奉職。1985年東京女子高等学校（現東京女子学園高等学校）教諭。1989年学校法人東京女子学園理事、1999年東京女子学園中学高等学校副校長、2000年同校校長、2003年同学園理事長。（一財）東京私立中学高等学校協会副会長、東京都私立学校審議会委員、（公財）東京都私学財団理事の外、（一財）日本私学教育研究所副理事長、日本私立中学高等学校連合会常任理事などの要職を務める。2009年4月～2010年3月文部科学省「学校の第三者評価のガイドラインの策定等に関する調査研究協力者会議」委員。2013年8月～12月同「いじめ防止基本方針策定協議会」協力者。2014年6月～同「いじめ防止対策協議会」協力者。

② 学校視察

学校法人聖マリア学園 聖光学院中学高等学校 〒231-8681 神奈川県横浜市中区滝之上 100

完全中高一貫教育の男子校。1958年中学校創立（高等学校は1961年創立）。キリスト教教育修士会（同会は1817年にジャン・マリー・ロベール・ド・ラ・ムネ神父によってフランスに創設された）によって設立された。建学の精神は「カトリック的世界観ののっとり、人類普遍の価値を尊重する人格の形成、あわせて、高尚、かつ、有能なる社会の成員を育成する」。キャッチフレーズは「Be Gentlemen!」。難関大学（旧帝大、早慶など）現役合格率全国No1を誇る進学校。姉妹校に「さゆり幼稚園」、「静岡聖光学院中学高等学校」、「セント・メリーズ・インターナショナル・スクール」。「文化を創る100年建築」のコンセプトで竣工された新校舎並びに地下一階地上三階の1500名収容のホールなどを視察する。

- ・授業視察
- ・施設視察

挨拶及び説明 工藤 誠一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長

③ 教育懇談会

関係者間のネットワークづくりに資するための懇談会を開催します（全員参加。懇談会費は参加費に含む）。

④ 報告

テーマ「建学精神で学校を輝かせる」

報告者 中川 武夫（一財）日本私学教育研究所 所長

⑤ 意見交換会

前日の講演、学校視察及び教育懇談会、当日の報告を受け、テーマに沿った議論を更に深めます（少人数によるグループ討議）。

◆ 日程概要 ◆

時刻	9 00	10 30	11 00	12 45	12 20	12 30	12 15	13 15	14 00	15	16 30	17 30	18 00	19	20 30
11/7 (金)		受付	開 会 式	① 講 演		昼 食	移 動	② 学 校 視 察		移 動	休 憩	③ 教 育 懇 談 会			
11/8 (土)	④ 報 告	⑤ 意 見 交 換 会		閉 会 式											

◆ 講師・指導員（順不同） ◆

實吉 幹夫 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長

工藤 誠一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長

吉田 晋 富士見丘中学高等学校 理事長・校長

中川 武夫 蒲田女子高等学校 顧問

◆ 専門委員・指導員（順不同） ◆

木内 秀樹 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長

近藤 彰郎 八雲学園中学高等学校 理事長・校長

山中 幸平 学校法人山中学園（如水館中学高等学校） 理事長

徳野 光博 学校法人東福岡学園（東福岡白蓮館中学校・東福岡高等学校） 理事長

◆ 事務担当 川本 芳久（一財）日本私学教育研究所 事務局次長 西沢 紀子 同 研究研修主幹

◆ 日程表

11月7日(金) [会場 3階セレナーデ]

09:30~ 役員・専門委員打合せ会 [3階 会議室319]

09:30	受付
10:00	◇ 開会式 司会 (一財)日本私学教育研究所 事務局次長 川本芳久 1. 開式 2. 主催者挨拶及び講話 (一財)日本私学教育研究所 理事・次世代リーダー育成専門委員 近藤彰郎 3. 日程説明 4. 閉式
10:45	◇ 講演 司会及び講師紹介 (一財)日本私学教育研究所 次世代リーダー育成専門委員 徳野光博 演題 「私立学校の次世代リーダーに望むこと」 講師 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長 實吉幹夫
12:15	昼食
13:15	移動(貸切バス)
14:00	◇ 学校視察 1. 授業視察 2. 施設視察 3. 挨拶及び説明 聖光学院中学高等学校 理事長・校長 工藤誠一
16:30	移動(貸切バス)
17:30	休憩
18:00	◇ 教育懇談会 [会場 42階トップオブヨコハマ「スカイバンケット」] 司会 川本芳久 1. 開会挨拶 (一財)日本私学教育研究所 理事長 吉田 晋 2. 乾杯 (一財)神奈川県私立中学高等学校協会 理事長 工藤誠一 3. 懇談 4. 閉会挨拶 (一財)日本私学教育研究所 副理事長 山中幸平
19:30	

11月8日(土) [会場 3階セレナーデ]

09:00	◇ 報告 司会及び報告者紹介 川本芳久 テーマ 「建学精神で学校を輝かせる」 報告者 (一財)日本私学教育研究所 所長 中川武夫
09:30	◇ 意見交換会 司会・進行 川本芳久 テーマ 「建学の精神をどう具現化するか」 ※少人数によるグループ討議 世話役 (一財)日本私学教育研究所 次世代リーダー育成専門委員長 木内秀樹 (一財)日本私学教育研究所 次世代リーダー育成専門委員 山中幸平 (一財)日本私学教育研究所 次世代リーダー育成専門委員 徳野光博 (一財)日本私学教育研究所 所長 中川武夫
11:20	◇ 閉会式 司会 川本芳久 1. 開式 2. 総括 (一財)日本私学教育研究所 次世代リーダー育成専門委員長 木内秀樹 3. 閉式
11:30	解散

◆ 概要 ◆

新たな一般研修の目玉として位置づけている本部会は、私立学校の将来を担う次世代リーダー（経営後継者）が、自校の建学の精神、歴史を深く理解した上で、これからの時代を見据え、自校と自信の理想の将来像を描き出すための考え方や視点を学び、その実現に向けて教職員と連携・協調しながら自律的に行動するために必要となる様々な知識やスキルを習得することを目的に設置された。現職リーダー（経営者）が理想や現実を語り、その経験から得られた教訓などを次世代に伝えるとともに、私学関係者のネットワークづくりや情報交換の場として、「私学の次世代リーダーは私学全体で育成する」との高邁な精神の下に実施している。

本年度は、11月7日（金）・8日（土）の2日間にわたり横浜市・新横浜プリンスホテルを主会場に、募集人員50人に対し参加人数50名で実施した。研究のねらいは「建学の精神をどう具現化するか」とした。

開会式では、主催者を代表して当研究所の近藤彰郎理事（一般財団法人東京私立中学高等学校協会会長、八雲学園中学高等学校理事長・校長）による挨拶と講話が行われた。近藤理事は、私学の自主性・独自性を守るには、関係団体との協力体制を密にし、常日頃から国や行政との関係作りが大切である。伝統は今までの積み上げを引き継ぎながら、時代の要請を取り入れ、柔軟に変化していくべきものだ。それによって時代の支持を受け続けていくことで、教育の中に厚みや幅が生まれ、重みが増して行くと言説、厳しい現状の中で私学の未来を確信させるものとなった。

講演では、中高連並びに東京都の私学を牽引する實吉幹夫氏（東京女子学園中学高等学校理事長・校長）が、「私立学校の次世代リーダーに望むこと」と題して、学校経営者・私学団体リーダーとして、経営のノウハウや知識、リーダーとボスの違い等、具体的な事例を挙げながら語った。實吉氏は、教職員は理念共同体でなければならぬ。同じ学校の仲間として、私学という大きな枠組みの中の一員として、皆が建学の精神・理念を共有・共感していくことで、先達の思いを引き継いでいく事ができる。「建学の精神」の歴史背景を振り返り、時代の流れに合わせながら柔軟に分かり易く読み替え伝えていくと同時に、学校の存在意義を問う。子どもたちにとって私立学校は母港であるべきだと力説し、未来からの留学生である生徒を指導する次世代リーダーに求められる心構えについて語った。

午後からは学校視察を実施。今回は当研究所理事の工藤誠一氏が理事長・校長を務める聖光学院中学高等学校（横浜市）を訪れた。根岸湾が一望出来る高台にある同校は、難関大学における高い進学実績を誇るカトリック系男子校の中高一貫校である。授業視察と共に、「文化を造る100年建築」をコンセプトに竣工されたばかりの新校舎・施設の視察も行った。光を多く取り入れた白を基調とする明るくモダンな校内、重厚な造りの校舎・施設、最先端の設備等、経営トップの力強いリーダーシップと愛校心・想いが十分に反映され、建学の精神が具現化された素晴らしい教育環境を目の当たりにし、参加者の誰もが驚きを隠せなかった。加えて、校内視察のアテンドとして、参加者をマンツーマンで案内して頂いた在校生保護者の協力もあり、学校視察はより一層充実した体験となった。

初日の夜には、積極的なネットワーク作りとして、参加者全員による教育懇談会が行われた。全国の私学団体リーダーとして、中央教育審議会委員を務め私学の意見・要望を果敢に発信し続ける当研究所の吉田晋理事長（富士見丘中学高等学校理事長・校長）は、開会挨拶の中で、公立学校の私学化という逆風が吹く中、今こそ私学が互いに互いを支え合っていくことの重要性に触れ、次世代リーダーには率先して私学ネットワーク作りを行い、周りの仲間の意見や助言に耳を傾け、助け合っていくしてほしい。私学団体として今後、私立中学校等就学支援金制度の創設に努めていくので、全国の私学が思いを一つに、子どもたちが希望する学校に進学できるよう尽力されたいと要請した。

学校視察でお世話になった地元神奈川県私立中学高等学校協会理事長工藤誠一氏（聖光学園中学高等学校理事長・校長）による乾杯の後、参加者同士の積極的な意見・情報交換等が、和やかな雰囲気の中で行われ、目的としていたネットワーク作りの第一歩となった。1日目の研修は山中幸平副理事長による閉会挨拶をもって終了した。

2日目は、「建学精神で学校を輝かせる」と題して、当研究所所長の中川武夫氏が報告を行い、公設民営など最新の教育政策の動向を受けて、我々は改めて「私学とは何か」を考える時期に来ており、建学の精神をセピア色のままにするのではなく、日々の教育活動・指導等で普段使うことによって活性化・具現化していく必要を訴え、意見交換会への流れを作り出した。意見交換会では4グループに分かれ、進行役・記録者を中心に当部会の企画・運営の責任者である次世代リーダー育成専門委員長の木内秀樹氏（東京成徳大学中学高等学校理事長・校長）、同専門委員の山中幸平氏（学校法人山中学園理事長）、同専門委員の徳野邦光氏（学校法人東福岡学園理事長）、そして中川武夫当研究所所長がグループの世話役として討議を行った。参加者は各校の現状と課題を報告・共有した。木内専門委員長が司会進行を務め、各グループの進行役・記録者が討議結果を報告した。各校からは、学校で一つの目標を定め、そこに向かって全校をあげて頑張っているプランや、生徒が建学の精神への理解を深められるような学校行事等の実践が報告され、リーダーたちは本音の語り合いから、明日への勇気と対策のヒントを得るとともに、私学の独自性を活かした教育のあり方を再確認した。

閉会式では、木内秀樹専門委員長がグループ討議と研修会を総括し、建学の精神の具現化については各校とも悩みは多く簡単には答えは出ないだろうが、グループ討議など研修プログラムで刺激を受け、その成果を自校に持ち帰り、それをどのように活かして具現化し、教職員・生徒に浸透させ、学校の発展につなげていくか、次回の本研修会で報告できるよう更なる研鑽を積みたい。生徒・卒業生にとって私立学校は、實吉校長は「帰って来る母なる港」、工藤校長は「故郷だ」と語られた。建学の精神に基づく教育を受けて育った生徒に、愛校心をもって貰うことが、私学が生きていく最大の源となる。リーダーが旗振り役となり、その下に教職員は結束し、私学らしさを発揮して行ってほしい。これを機に知り合った他校のリーダーとの交流の輪を広げていくよう期待していると締め括った。

◆ 開会式 ◆

● 「挨拶及び講話」

近藤 彰郎 一般財団法人日本私学教育研究所 理事・次世代リーダー育成専門委員
(八雲学園中学高等学校 理事長・校長)

私立学校が自主性・独自性、建学の精神に基づく伝統を守るために
リーダーは周りの理解を得る日常の努力を怠らず、信念を持って実践を積み重ね
そして積み上げを引き継ぎつつ、時代の要請に応え、変化することで、時代の支持を受け続けていく

私立学校にはいろいろな学校があり、歴史や教育実践、学校経営もそれぞれ異なる。これらを次世代につなげていこうと当部会を始めた。様々な経験を見聞きすることで次の時代に自分たちがリーダーになった時の示唆になることが期待される。私立学校を顧みたと、右肩上がり努力をすればいい結果が出るということばかりではない。私立学校にはそれぞれ異なる建学の精神があり、それを互いに認め合い共に育っていくことが大事だ。私は私学にいて東京私立中学高等学校協会・中高連の役員として活動に携わっているが、私学の自主性、私学と公立との教育の違いを理解することなく国公立の教育を変えようとする人もいる。私学の自主性については、私立学校法、私立学校振興助成法、教育基本法、どの法律を見ても条文に「私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ」、「学校教育における私立学校の果たす重要な役割にかんがみ」、「私立学校の有する公の性質及び学校教育において果たす重要な役割にかんがみ」と書いてあるが、法律で定めたことを無視する人たちが現実にはおり、まずはここを守っていかなければ、建学の精神すら守ることはできない。未履修問題が吹き荒れた後の平成19年、地教法改正に係る私学行政への教育委員会の関与については、私立学校はその自主性・独自性が法律で尊重されているにもかかわらず、教委が指導・助言するようになれば私立学校は命をとられるも同然と、私立学校の自主性を守るために中高連から関係方面への要請を重ねた結果、国会附帯決議として指導は削除され、私立学校から依頼された時のみ教委は助言・援助できるという法律になった。公設民営にしても私学の厳しい現状を訴える声は届かない。私学のリーダーになる人たちには、当り前の中で自主性が保たれているのではなく、このような現実もあると肌身で感じながら私学を経営していくことが必要である。

もちろん私学に理解のある人は沢山おり、物事は多数決という中で中心的な人物が力を持って決めているのも事実だ。リーダーとなるべき人たちは常日頃から学校の中のことや経営をきちんと行うのは当たり前のことだが、学校の外との付き合い、国や地域の議員、文部科学省や都道府県の行政の人達に、常日頃から如何に私立学校のことを理解して貰う努力をしていくかが重要だ。ここぞという時にその人達に、この施策について私立学校はこう考えている、この施策をとられたら私立学校は疲弊してしまうと直に正しく伝えていく。行政で言えば、都道府県の私学主管部課は普段から足を運んで触れ合っておく。私学を分かち合っておらず、私学行政を経験していない文科省幹部職員にも話して理解を促せば、施策の考え方と結び付く。だからこそ私学協会や中高連の立場だけでなく私立学校、自身の学校を理解し応援してくれる保護者や近隣の人々、マスコミ等とも普段から真摯に付き合い、万一の時はきちんと話し合い伝えていくことだ。学校の中にいると外が見え難くなることもある。リーダーとなる人は常日頃から学校の中はもとより外部とも個人的繋がりを大切に接点を持っておくべきだ。また、建学の精神に基づく伝統を引き継いでいかなければならない。伝統とは時代の要請を取り入れて変化をしていくことだと考える。buildupの世界ゆえにall or nothingで今まで積み上げたものを捨てて新しくという経営者もいるだろうが、それは非常にもったいないことだ。今までの積み上げを引き継ぎつつ、時代の要請を取り入れて変化をすることによって、私学は時代の支持を受け続けていくことだろう。そうすることで厚みや横幅が生まれ、教育の中に重みがぐっと出てくるのではないかと。理念や理屈で重みを増すことはできない。小学校・中学校・高等学校の教育は実践がどれだけ積み上げられているかによってことがなされよう。公立との一番の違いは何か一施設設備よりもその学校に入った時の教員や生徒の雰囲気がある。そこに温かさ、親しみはあるのかどうかによって公立との差別化ができる。男子校・女子校の良さなど長年の蓄積によって醸し出されているものを大事にしてほしい。

何事にも屈することなく乗り越えてきた歴史と強い信念があって今の私学がある。ゆえに我々が求めている道は明らかであろう。信念を持って、真っ当な道を歩きなさいと生徒を育てていくのが、私学の教育であろう。



近藤 彰郎氏による講話



次世代リーダー育成専門委員



司会を務める徳野光博専門委員



講話に聴き入る参加者

●参加者の声

- 私学の現状がよく理解出来た。
- 日頃から外との関わりを持っておくことの大切さを学んだ。
- 建学の精神を互いに認め合い、共に高めていく必要性を痛感した。
- 近藤先生のご講話には、私学人として刺激を受けた。
- 行政・マスコミ等の外部との付き合いの重要性。
- 私学は当たり前の中で自主性が保たれている訳では無い。
- 政府および文科省の私学に対する認識について考えさせられた。
- 私学の独自性・存在意義への理解が深まった。

◆ 講演 ◆

● 講演「私立学校の次世代リーダーに望むこと」

實吉 幹夫 東京女子学園中学高等学校 理事長・校長
 (一般財団法人日本私学教育研究所副理事長)

「建学の精神」とその背景を振り返り、不易流行を見極め
 今の時代に読み替えて伝えるとともに、その存在意義を問う
 子どもたちにとって私立学校は“母港”、だからこそ私学の教職員は“理念共同体”であるべきだ

教育をどう風にか考えるか。大学卒業後に不動産会社に入社した私がなぜ今ここに居るのか。本校は1901年(明治34年)の高等女学校令を受けて、1903年(明治36年)に棚橋一郎先生を中心に私の祖父を含む7名によって創設された。私立学校は創立者がある思いを持って設立されるが、本校が設立申請時に掲げた設立目的には「女子に高等普通教育を授け、知徳を養い、識見を高め、教養ある女性として自己の立場を理解し、他日その能力を十分に発揮させること」と書かれている。今は子どもたちや保護者、教職員にもわかりやすいように建学の精神として「教養と行動力を兼ね備えた女性(ひと)を育む」と言い換えている。建学の精神を今の時代に読み替えて顕在化することは必要だ。自分はこの学校でどういう人間として育てていくべきかという教育理念として、これからの時代に生きていく者が、自分の未来、キャリア=自分の一生をどう作っていくのか意識するのは大事だ。建学の精神を考える時、ミッションスクール=キリスト教主義の学校であるが、創立者がミッションをもって創った私立学校はすべてミッションスクールと言える。

リーダーに求められる視点として、①ミッション、②パッション、③ビジョンの3つは欠かせない。自分のミッションを自らに問いかけ、組織体を動かす為のビジョンを描き、情熱を持って行動することが大事だ。理事長・校長は年度始めに1年間の学校経営方針をビジョンとして打ち出し教職員に示すことで、彼らはこの1年間自分がどう行動し、何処に寄り添って子どもたちに接していけば良いのか考え得る。リーダーに必要なものをリーダーシップの頭文字で示すと、L(LOVE 愛する心)、E(Experience 経験)、A(Action 行動力)、D(Direction 運営能力)、E(Education 教育力)、R(Recreation 創造力)、S(Service 奉仕の心)、H(Health 健康な身体) -リーダーは健康でなければならない。先生が元気でなければ、子どもたちは元気で生き活きていられない。I(idea 斬新な発想力)も必要。そしてP(Personality 個性) - これらを兼ね備えることで初めてリーダーシップを発揮できる。欠けた部分は一生学習を続けることで補える。

道徳の教科化で道徳を教えらるる自信はない。これをしてはいけな。こういう風になりなさいと教えるのは道徳ではない。池田晶子氏が遺された「14歳からの哲学」一冊あれば1年間ホームルームできる。我々は哲学することを忘れていないだろうか。池田氏は「貴方にとって人生最大の目標は何か?」と問いかけ、「今、生きている自分が幸せに満ちた人生を歩んでいると感じられること」「自分の人生を振り返った時に私の人生は本当に幸せだったと言えるような生き方をすること」と答えている。「あなたの人生は自分で作る」 - これは正にキャリア教育の最終章である。

「リーダーとボスの違い」を意識している。ボスは人に努力を強要し、酷使するが、リーダーは人を導く。ボスは権威に頼り、権力を当てにするが、リーダーは協同・協力し合う。組織体の中で、ボスは「私は…」というが、仲間と一緒に仕事しているリーダーは「私たちは…」と言ってくれる。ボスは不安や恐怖を与えるのではなく、リーダーは信頼・自信・安心を生むようにしなければならない。ボスはどうするかを知っているが、リーダーはどうするかを示す。ボスのように人を責め、咎めてはいけない、組織の中に熱狂を生み出していくのがリーダーだ。単調で嫌な仕事をさせるのがボスで、興味深い仕事を与えるリーダーによって組織は成り立つのだと言えよう。

文科省調査では、高校生の自己満足度、自己評価率が米国・中国・韓国等と比べて低く、帰属意識や自己を認める比率が低いと言われる。自分の居場所があり、私は大事にされていると感じることは人が生きていく術だ。家庭の中で子どもに仕事、役割を持たせるよう保護者をお願いしている。自分を認めてくれる親がいることが子供の実体験となる。家族の一員として、自分の幸せ、家族の幸せをどう作るかは人間の営みの中で大事なことだ。グローバル化、多様化の時代は、互いの価値観をぶつけ合い人間関係が生まれて初めてコミュニケーションが取れたことになる。

リーダーとして組織の中での自分の立ち位置はどうあるべきか。建学の精神の次にあるのが教育理念で、「不易流行」という言葉が最も相応しい。不易の部分としては建学の精神と教育理念がある。私どもの組織はある理念を皆が共有する「理念共同体」でなければならない。理念共同体をどう作っていくのが組織を作る上での理事長・校長の役目である。時として「私立学校の生き残りをかけて」、「運命共同体」と言う人もいるが私は運命共同体だとは思わない。理念があって、それを共有して初めて組織が活性化するのだから「理念共同体」だ。先生方、生徒、保護者、卒業生、全てがその理念の中で共同体の一員との意識をどれ位持つことができるのか、そういう組織・学校になることが大事だ。私立学校がこれから歩んで行く道は3つ程あるのではない。一つは建学の精神と教育理念に準じて不易の部分だけでずっと生きていこうという学校で、但し流行の部分をと落としているからその理念に準じて埋没してしまう可能性はある。次の生き方としては、理念の部分捨てて、あの学校はこうして生徒募集に成功した、進学率が伸びたと自分の学校はないものを付け加えて、教員が忙しくなってしまう。最後は、私立学校である以上、本校はこれがあって存在できるというように建学の精神、教育理念を発展させ、学校を作り上げることで私立学校としての意味を持つ。建学の精神は振り返り、理念共同体として学校の存在意義を問い直さなければならない。

歴史を振り返ることも大切だ。私どもが預かっているのは次の時代に生きるために今の時代に来ている未来からの留学に来ている子どもたちだ。彼らが自分はどういう生き方をするかを自ら作るために私たちは何ができるのか、そういう思いで教育の世界を動かしてほしい。人生は一回限りで、子どもたちは今の時代を生きるると同時に次の時代を生きるために何をすべきなのか、時代性を捉えなさいと言うことが大事だ。そのためには私たちは過去の難民であってはならない。今、一億相評論家が囁いている教育論は行き先を示すものではなく、自己の教育経験だけでは舵取りを誤る。こんなに改革してどんどん変えて良いのか。副校長、校長、理事長に就いて学校を責任持って動かす中で、時代性を読み、不易流行の変えていくべき流行の部分はどう読み取っていくのかは大事だが、改革ばかりに捕らわれては未来からの留学生に示す中身が消えてしまう恐れがある。

私たちの人生はその時代にしか生きられない。その定めの中で生きる以上、学習指導要領の変遷を理解しておくことは欠かせない。1996年 UNESCO21世紀国際教育委員会がまとめた報告書から世界に発信されたのが学習の柱となる4つのフレーズ「知るために学ぶ」「行動するために学ぶ」「共に生きるために学ぶ」「人として生きるために学ぶ」であった。文科省はこれを「生きる力」と言った。自分の生き方として、自分が社会に貢献できている、自分の立ち位置が世の中に必要とされていると思うことができる子どもたちを、私たちは育てていかなければならない。それは「共に生きる」ということだ。日本の学習指導要領はこれらのことを受けた内容になっていたであろうか？生産から消費主体社会に変わり、臨教審答申の「個性重視の原則」から個が突出してきた。その時代に教育を受けたモンスター・ペアレントが現れ、教育も消費だ、サービスだと言われ始めた。どういう生き方をする子供に育てていくのか。その意味で教育は生産分野であって決して消費分野ではない。帰属収入(学納金)であればいいが、高等学校等就学支援金の分野から世の親たちにとって教育が消費や福祉になっていくのは困る。その意味では教育は投資と言えよう。四六答申に書かれた教育の方向性がなかなか実現しないからと学習指導要領の変遷を理解して親の育ててきた背景を踏まえ、根気よく親や子供達と話し合っていくことが大事だ。この学校が持つ価値観には譲れない部分がある。私立学校で子どもたちを育てるに当たっては中心となるぶれない一つの理念を作り、そこを理念共同体の中で共有していかなければならない。本校の卒業式で、私は生徒たちに次の言葉を送っている。「東京女子学園は君たちの母校ではない。母なる学校を母校と言うのではない。君たちはこれから人生を生きていかなければならない。海原へと出ていかなければならない。いろいろ迷うこともあるのだろう。迷った時に必ず帰ってくる港を持っていることは大事だ。だから東京女子学園は君たちの港なのだ。船は必ず帰属する港を持っており、航海に疲れたら帰る港がある。自分が人生を生きていく時に帰ることのできる港—学校は母なる港でなければならず、母港であるためには学校は理念共同体でなければならない。

2012年から中学校で、2013年から高等学校で実施される学習指導要領には、初めて学力とは何かを書き込まれた。一つは「学んだ力」(知識技能の習得)、第二に「学ぶ力」(習得した知識技能を活用し周りの諸問題を解決していく力)、第

三に「学ぼうとする力」(意欲)である。文科省調査では、わが国の高校生の自己肯定感は低く、アメリカで約80%に対して日本は15~20%しかない。これからの時代は何が問題なのか示してはくれないのだから、自分自身で考え、発見し、解決していく力を持つことが大切だ。アメリカ・デューク大学の研究者のキャシー・デヴィッドソン氏が2011年ニューヨークタイムズ紙に発表した論文では、2011年にアメリカの小学校に入学した児童の65%が、大学卒業時には今の時代にはない職種に就くことになるだろうと予測している。校長、理事長として預かる子どもたちにどう教えればいいのか。迷っているからこそ皆さんと一緒に学び合う機会が必要だ。グループ討論で悩みや他校の話聞き一つでも新しい道を発見して学校に帰ってほしい。

昭和50年7月に成立した私立学校振興助成法が今ないがしろにされていると感じる。私立学校振興助成法をしっかりと読見込んで議員がどれだけいるのか。同法には第1条に定める3つの目的がある。①私立学校の教育条件の維持及び向上、②私立学校の在学生徒等に係る修学上の経済的負担の軽減、③私立学校の経営の健全性を高め、もつて私立学校の健全な発達に資する。これを私学人として胸に叩き込み、国からの地方交付税国からきた金を教育以外に使わないように主張していくことも都道府県私学協会と共有・協議し、各地域の私学行政関係者としてしっかり話し込み、その重要性を伝えて予算を引き出してほしい。



實吉 幹夫氏による講演



次世代に夢をつなぐ参加者



●参加者の声

- 建学の精神を今の時代に読み替えて(言い換えて)伝えると言う事が印象に残った。
- 理念共同体をどう作っていくか!という言葉が大切にしながら、学校改革に取り組んでいきたい。
- リーダーとボスの比較が大変わかりやすかった。 ○建学の精神をどう共有しなければならないか参考になった。
- 建学の精神を今の時代に読み読み替え「あなたの人生で最大の目標は何ですか」に感銘を受けた。
- 学校の内だけでなく、外にもしっかり気を配りながら学校運営することの大切さを学んだ。
- 「教育がサービス業化したところに様々な問題がある」という点に共鳴した。
- 理念共同体である私学の一員として顧客である生徒・保護者のため努力しなければならないと思った。
- リーダーには深い広い教養・知識が子育て、人材育成にとって必要であることを話から深く理解出来た。
- 生徒は未来からの預かりものであるとリーダーは常に意識して教育を押し進めていかねばならない。不易と流行について。○リーダーとしての資質を再確認出来た。質問の時間があれば良かった。

◆ 学校視察 ◆

●「挨拶・新校舎整備計画について」

工藤 誠一 聖光学院中学高等学校 理事長・校長

“文化を造る「100年建築」”がコンセプト
 聖光の鐘の音は地域のシンボルとして鳴り続ける
 私学は子どもたちに思い出と心の翼を与え、やがて“ふるさと”となる

本校は今年で創立57年目を迎える中で、3年半前に全校舎の建替整備計画を決断し、11月15日に無事竣工となるが、良い時期に建てられたと感じている。次世代の私学を担うリーダーにとって本校事例が参考になれば幸いである。

本校は1958年聖光学院中学校として開校した。本学院の設立母体はキリスト教教育修士会であるが、日本の経営方式でやってきた。本校とさゆり幼稚園は姉妹校で、セント・メリーズ・インターナショナル・スクール、静岡聖光学院中学高等学校は現在別法人となっている。私は本校の卒業生で教員から事務長を経て、校長・理事長を務めている。

本校のグラウンドにいびつな形で入り込んでいた家三軒の土地を手に入れた2008年に校舎建替えに着手することとし、2010年秋に入札を開始した。今だったらリーマンショック当時の価格ではできなかっただろう。結果として自分が決断する時期を、最後にグラウンド用の土地を買えた時と決めていたのが功を奏した。

新校舎整備計画では、新校舎のコンセプトに「文化を創る100年建築」を掲げている。カトリックのミッションスクールとして入口にアンジェラスの鐘を設置したことで、入学式と卒業式には鐘が鳴って子どもたちを迎え、子どもたちが巣立っていくという私の夢はかなった。毎日正午と午後5時の2回、鐘を鳴らしているが、これは学校の時程ではなく近隣の皆さんの生活に合わせたもので、今では聖光の鐘はお昼と帰宅時間の合図として受け入れられ、地域の中に根ざすようになった。X'masにはマリア様と一緒に飾り付けして、一晩中御堂に灯りが点り、校門のアプローチには一晩中入ることができる。本校は男子校であり、外人墓地、港の見える丘公園に彼女とデートにきた卒業生が母校に立ち寄れる。私学は心の故郷でなければならないと思っているので、そのような機会に来られるよう配慮している。100年保つ建築ということで煉瓦積みの建物になった。建築の遠近法によって駅に向かってだんだん遠くなる、学校に近づくにつれて門が大きくなる。学校に付き物の桜はソメイヨシノと枝垂れ桜を植えている。以前の校舎は崖に向かって建ており暗かったため、新校舎は光が差し込み、風が通るようにした。本校卒業生の小田和正氏は私どもの学園を愛して頑張れと励ましてくれる。小田氏は本校のラムネホールで演奏したのがオフコースの始まりで、新・ラムネホールにオフコースとして戻ってくる。グラウンドは近隣との共生も視野に人工芝に変えた。バックヤードの根岸森林公園で生徒はランニングができる。セミナーハウスは日祝を含めて朝8時から夜9時まで高校3年生の自習室としている。講堂棟・聖堂、中学校棟、高校棟があり、太陽光発電パネルを設置した体育館、体育棟・テニスコート、野球場を整備した。寄付を頂いた諸先輩方・保護者の皆様には、私がサインしてお礼状を出した。融資では平成27年度まで日本私立学校振興・共済事業団が実施している防災(地震)対策費(耐震改修特別融資)を利用した。来年度から授業料を値上げする。次世代リーダーは学校という独特の世界で苦勞することもあるので、リーダー同士で集まって情報交換すると良いだろう。

今回の建築プロジェクトに当たって考えたのは、57年の伝統と品性を有するカトリック校としての雰囲気と温もりを大切にするために鐘楼や御堂などなるべく木を使うこと、板目の出ている壁、樹木の配置、煉瓦積みの建物などにこだわった。そして文化を造るということだ。私学は総じて人事異動がなく、その場において文化を発信する人が変わらない。ゆえにその人の思いが継承されていき、文化を生み出すことができるのが私学の良さだと考えている。ラムネホールは優れた音響性能を備えた音楽ホールで、音楽コンサートを近隣住民に開放している。校歌は朝の根岸湾の光景をうたっており、屋上庭園は海を感じる場所とし、海が見えるザビエルセンター・セミナーハウス方面に生徒が行きやすい動線にした。生徒の居場所を廊下の其処此処に作った。食堂は休日もガードマンが居り使える。最高の風通しを明るい廊下は風が通る空間とした。男子校らしくサッカー場、野球場、体育館等公式戦ができるスポーツ環境を整えた。

本校の保護者、母親たちへの配慮として、家庭が本校に対して望まれることを考えている。本校は宿泊行事が多い。私学が公立に優るのは、公立は校長人事異動のある4月まで詳細な行事日程が組めない。公立の場合、行事の旅費交通費は県費で賄われるので生徒の行事を増やすのは難しいが、私学は受益者負担で種々の行事ができるのが強みだ。本日は保護者に案内・説明アテンダントを頼んでいるが、保護者会の役員は中学校入試が終わった3月前に私が電話で依頼し6年間務めもらう。女性保護者のためパウダールームを設け、校内全てのトイレをウォシュレットにした。

2011年に整備計画に着工できたのは、最後の一軒を買えたらその時点で実行しようと決めていたことがターニングポイントになった。自分が資金も教育プログラムも含めてランドデザインを描くことのできる立場にいたことも良かった。カトリック校として私たち人間の力だけでは如何ともし難い部分は神様のお力ではないかと改めて感じている。

私学は長い目で子どもたちを見ていくことができる。私は良い教育をしていけば、やがてその子どもたちが入ってくるだろうと思い描き、それを楽しみに教員生活を送ってきた。今は核家族化が進み、大人になると都会や地方の子どもたちにとって教員の変わらない私学は心の故郷になるのだろう。ゆえに私たちは日々の教育活動の中で長い目で子どもたちの成長を見て、若き日の思い出や将来羽ばたくための心の翼を与えることができるのではないかと。そしてその翼を持ってやがて子どもたちが帰ってくる日を待つ。それが私たち私学教育に携わる者の楽しみではないだろうか。

Q) 各教科の教員先をどのようにまとめてプランを作られたのか。

A) 教員4名と建築アドバイザー等を含む6名による建築委員会を設け、各教科の意見をまとめて作り上げた。実験室、図書館、音楽室等は専門会社にアドバイスをデザインを依頼し、最後は私自身が査定し決定した。予算を念頭に置きつつ100年建築のコンセプトから長く使って誇れるものなどこだわりを持って選んだ。スタンウェイのピアノで子どもたちに本物を体感させること、広い職員室、沢山の会議室、良い机・椅子・教材・備品を揃えることで人事異動のない場で教員に気持ちよく働いてもらうことが肝要だと考えた。リーダーにとって達成感とある程度の割り切りは大事だ。

● **お礼の言葉** 木内 秀樹 一般財団法人日本私学教育研究所 次世代リーダー育成部会委員長

私学人・教育者としての思いを込め、トップリーダーが牽引 建学の精神を具現化された、正に理想の新校舎

工藤理事長をはじめ教職員、保護者の皆様にご案内頂き心よりお礼申し上げます。保護者によるご案内は驚きで素晴らしいものだった。工藤理事長のこだわりが校内の随所に見られ、今の話から何から何までご自身でこだわって実現されたことが伝わってきた。通常の視察では聞くことができない率直かつ貴重な話を聞くことができたことに感謝している。



新校舎整備計画について語る工藤誠一理事長・校長



聖光学院中学高等学校の新校舎



視察校へバスで移動



視察では、同校生徒の保護者が参加者一人ひとりに案内役として随行し説明



映像を交えた新校舎整備計画の説明



木内秀樹専門委員長よりお礼の言葉

●参加者の声●

- 教員・保護者・生徒が持っている「学校へのプライド」・「愛校心」を強く感じた。
- 素晴らしい校舎・施設・雰囲気であった。
- 工藤校長の計算しつくされたこだわりにも、大変感銘を受けた。
- 工藤先生のリーダーシップに感銘を受けた。
- デザイン・資金繰りについても大変参考になった。
- 細部まで徹底してこだわり抜いた環境作りの奥に、卒業生・保護者・教職員・生徒など、聖光学院の関わるすべての人への深い愛を感じ、私学のリーダーたる者、こうあるべし！と深く感銘を受けた。
- 生徒・保護者等への細かい気遣いに感銘した。
- PTAの方々の気持ちの良い対応、工藤先生の力強いリーダーシップに感銘した。
- 保護者の方にご案内いただき、感動した。 ○一人ひとりでの案内が大変良かった。
- 学校の内部までしっかり見学できて感謝している。

◆ 教育懇談会 ◆

● 理事長挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所 理事長

私立学校は、先達が私立学校法の定める寄附行為によって私財を投げ打ち、自分が将来このような子供を育てたいという思いを持って設立された。その私立学校を何としても維持して、先達の思いと共に正しいルートできちんと引き継いでいく。自分たちで命をかけてしっかりと学校を守れば引き継いでいけるものだ。私立学校には今、逆風が吹いている。厳しい現況に私立学校本来の姿をつい忘れてしまう人もいる。自分の学校さえ良ければという思いから間違った方向に進んでしまうこともあるだろう。次世代リーダー育成部会という名称に込められた意味は何かと言えば、皆さんの世代にネットワークを作って行ってほしい。自分一人では何もできない。私は中高連会長を務めているが、東京私立中学高等学校協会長の近藤先生をはじめ、互いが互いを支え合っている。理事長と校長を兼務すると一歩間違えれば独裁者になりかねない。誰の声も聞かないでやろうとすれば何でもできるからだ。そこで鈴をつけてくれる人がいるかないか。間違った判断をしそうな時には身内よりもむしろ周りの仲間が言うことの方が聞く耳を持ちやすい。それはとても幸せなことだ。このような研修会で知り合った人たちが、何かあった時に非常に大きい力になる。工藤先生も自分の卒業された学校を守っている。その思いを皆で共有して持ちたい、そのために次世代リーダー育成部会を始めた。木内先生をトップにプログラムを企画していくので、全国の先生方に私立学校を守るのだという強い思いを持ってほしい。公立の私立学校化が進む中で、国立義務教育学校、公立中高一貫教育校(中学校)は就学指定校ではなく、適性検査で中高一貫教育校の中学校に入学して、もし自分に合わなければ就学指定校に入ることができる。平成 28 年度に向けて私立中学校に通う子どもたちへの就学支援金の実現に取り組んでいきたい。この支援を実現しないことには私立中学校は保たなくなる。さらに国公立に小中高一貫教育制度が加われば、私立中学校に益々生徒が入って来なくなる。保護者の経済状況等を考えれば、私立中学校は就学指定を自らの意思で権利放棄していると言われても、国公立中高一貫教育校(中学校)も同じだと主張できる。この運動は来年度、次世代リーダーの皆さんにも始めてほしい。同じ土俵の上であれば必ずや私立学校を選んでもらえるだろう。私立学校にはいろいろな種類の学校があり、その数だけ独自性がある。男子校、女子校、男女共学校などいろいろな教育がある。それを選んで、その学校に行きたい生徒が行くことができるようにすれば、どれほど日本の教育は良くなるだろうか。それを是非訴えていかなければならないと運動をスタートさせている。その意味でもこのような機会に皆さんが知り合って、思いを一つにして協力していけば、日本の私立学校は繁栄していく。そうすれば日本の教育は良くなっていく。その思いを是非一つにしていってほしい。



吉田晋理事長による挨拶



工藤誠一氏による乾杯



参加者による懇談・交流



参加者による懇談・交流



山中幸平副理事長による挨拶で初日終了

●参加者の声●

- 他県の様子を聞き各校の私学の状況を知ることができた。
- 多くの先生と知り合うことが出来て、頼もしく感じた。今後も交流出来れば良いと思う。
- 和やかな雰囲気の中で、本音で話が出る機会となった。新たな出会いがあり有意義な時間を過ごせた。
- 日頃なかなか会うことのない全国のリーダーの方々とは知り合う機会となり、大変有意義な会であった。
- ネットワークを大切にしていきたい。 ○繋がりが深まって有り難かった。
- 自分と同世代の方や地域が違って同じ私学としての悩み・楽しみを共有できた。
- 私学の教員として共通の話が自然に出来た。ネットワークによって団結するとともに良きライバル関係を作りたい。

◆ 報告 ◆

● 報告「建学精神で学校を輝かせる」

中川 武夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長

今こそ「私学とは何か」を考える時 建学の精神を普段使いし、日々の教育活動に散りばめていき 皆で活性化していく努力は欠かせない

国が進める教育改革の現状を踏まえた上で、私学の次世代リーダーの方々に考えてほしいことについて報告したい。本研修会のメインプログラムである意見交換会に先立ち、今回取りあげた「建学の精神の具現化」は大変難しいテーマであるが、ここに来て「公立学校の私学化」が進む中で公私の区別がつき難くなっており、「何のための私学か」という問題を今こそ真剣に考えるべき時期に来ている。この後の意見交換会に向けた話題提供の機会としてお聞き願いたい。

《公立学校私学化の波》公立小中一貫教育校は全国で沢山の学校が既実践しており、大半は過疎化地域の統廃合整備推進のためだが、問題は品川区が先導する都市型の一貫校で、優秀な子供を私学に行かせない公立の抱え込みであるのは明白だ。鹿児島県立楠隼中学高等学校は、県知事が多額の県費を使って自分の夢を託した中高一貫教育校だ。大阪府・大阪市の公設民営学校構想は国家戦略特区で公立学校の条件で運営を民間に任せるもので10月末閣議決定された。現政権の考え方を背景に、私学より安い学費で私学並みの柔軟なカリキュラムによって、公立学校が私学以上の教育を実施しようとしている。私学の良いところ取りで公立の私学化が進めば差別化は益々難しくなってくる。

それでは私学とは一体何なのか？ 私学関係者は、「私学には伝統がある」、「建学精神がある」と口を揃えて言うが、果たして本当か？ と聞き返したくなる時が往々にしてある。「私学は面倒見が違う」本当にそうだろうか？ 公立学校の事件でダメージを受けた生徒の心のケアに県教委は心理カウンセラーを大量送り込むが、私学の場合はそこまでできるだろうか。小学校、中学校から落ちこぼれた児童・生徒に放課後時間として勉強の面倒を見たくても部活動指導や職員会議等で忙しい私学の教員はなかなか対応できない。公立学校であれば退職教員を雇用し子どもたちを指導できる。これで私学は面倒見がいいと本当に言えるだろうか？ 組織力では敵わなくても、一人ひとりの先生方に愛校心があり入ってきてくれた生徒に愛着があり頑張って指導して結果を出すことはできるだろうか、対外的に面倒見が公立とは違うといい切れるのかという問題がある。また、「建学の精神がある」という問題では、創立者が生きておられる時は非常に新鮮で瑞々しくその言葉が教職員や生徒に染み込んでくるところはあっただろうが、創立者が亡くなり時間が経つにつれて写真がセピア色になるが如く乾いた肖像画・写真を使って理事長・校長が熱く語っても、生徒や教職員の胸にひびくことは少ないのではないか。全ての学校がそうとは言えないが、それを維持継投していくのは大変かつ労力もかかる。今回の討議テーマは正にそのことではないか。宗教系の学校はそう難しくはないだろうが、他の学校は大変だろう。

《私立学校と公立学校の違い》 公立学校＝水道水、私学＝天然水に例えられる。水道水は川の水の濾過を繰り返し塩素消毒し安価で均等に家庭に供給される。公立は基本的に税金で運営されており、納税者に支障のある話は濾過して最後に知育・徳育・体育が残る。一方、天然水には水源によっては不純物が混ざっている。私学には各創立者の意思があるので、自分の体質に合わなければ天然水でお腹を壊すこともあるが、合っていればこれほど美味しく良いものはない。表面上の口当たりや美味しさの問題ではなく、水の成分をしっかり際立たせて理解してもらうことが求められる。

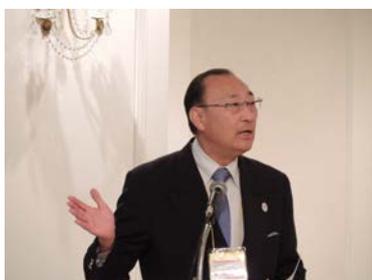
《私学の現状は？》 建学の精神について生徒や保護者はどのように見ているのか。学校を自転車に例えると、前輪は「教育要求」である。親子共に、学力を伸ばしたい、進路を保証してほしい、〇〇大学に行きたい、インターハイに出たい、甲子園に行きたいなど実利的要求が非常に強い。自転車は進学でも就職でも進みたい方向にハンドルを切るのはたやすい。他方、後輪は「建学の精神」である。問題は自転車を選ぶ時の親や生徒の感覚で、殆どが「前輪」で選んでいる。本音を言えば、殆どの人が前輪にしか価値を感じていない。だからこそ私立学校は生徒募集で前輪をいかに立派に見せようかに必死になっている。前輪ばかりに目が向いて気がつけば後輪もあったという状態で3年間あるいは6年間経って卒業式迎えた時に、何のための私立学校かが問題となる。最初はこれで構わないが走り出した生徒や親が、待てよ、自転車というのは後輪があるから前へ進むのだ、長い人生の生き方に置いて確かに前輪は大事だけれど、それ以上に後輪、充実した人生を送るために創立者の教え建学の精神は大事だと気づき、前後の車輪のバランスが取れる。それこそが私立学校が存在する意義ではないか。各校がどんな考え方をもち、努力をしているのかが討議の論点になる。

教職員のスタンスはどうなのか？ 私立学校を反物に例えると、縦糸は建学の精神であり、百年経っても何人たりとも切ってはならない大切なものだ。教職員は最新の教育手法を使って横糸となってここに編み込まれていくことが求められる。そのためには縦糸を頼りに横糸を編み込むという作業が現場の教員に行われなければならない。これは昨日實吉先生が「理念の共有」と言われた事だ。ところが現実はどうか。セピア色になった校訓、形骸化した宗教系学校ならば聖職者が一生懸命語るだろうが、しかし教員や生徒は傍観者のように反対しない、邪魔しない、聖職者に任せておけばいいという中で、信仰は自由だけれども、人生を生きていく上でこの教えは大事だと教員が自ら思い、それをどのように日常の教育活動に生かしていくか。きちんとできなければ美しい反物は織上がらない。縦糸は縦糸、横糸とは関係ないとしていけば、それは私立学校ではないだろう。

《建学精神活性化について》 建学の精神をどう活性化させていくか。哲学者の梅原猛氏はその国の道德・文化を植物の花に例えたその根っこは宗教であると述べている。道德等の善悪の基準は多分に宗教に裏打ちされている。これを学校に置き換えた場合、道德教育の教科化で考えると、宗教色のある学校ばかりではないので、宗教を建学の精神に置き換え、照らして、その是非はどうか、学校独自に道德を作り上げていくしかないのではないか。このことも含めて私立学校は建学の精神をきちんとしなければならぬ。そして建学の精神が植物だとすれば、しっかり水を与え、太陽光を当て、一生懸命世話して、綺麗に咲き続けるように活性化していく。みんなで何とかしていく努力が欠かせない。

私立学校の建学の精神は、大事に奉り飾っておくのではなく普段使いするものだ。生徒・教科・進路指導、部活動等何をするにせよそこに建学の精神が散りばめられて初めてそれが私立学校の教育だと言えるだろう。しかし現実には、宗教色のある学校は何かできようが、そうでない学校はなかなか難しい。創立者がある思いを持ってある言葉によってそれを表している時にそれが現代に使えるのか。どんなことを言っているのかよくわからない時にどうするのか。そういう学校はただ表面上の言葉や絵だけを置くだけでなく、創立者の先生が活躍してきた時代背景、社会構造をその時の人々の心の動き、その創立者が何を思い、どんな人を育てようとしていたのか、一度掘り下げて検証し直し、そこに思いを込めてみる、その思いを誰もが日常の教育活動で使える平易な言葉に置き換えて、皆で共感・共有していく。それが私立学校の教育ではないか。学校の状況は様々だが、建学の精神をどう具現化するか、どうやって建学の精神に息吹を吹き込むのか、このことが今、私立学校に求められている。そして教職員がどうそれに関わっていくのかが重要だ。大変難しい問題ではあるが、ここから目を離すことなく互いに掘り下げていきたい。

各グループの闊達な議論を期待すると共に、私立学校全体の為に当研究所としても対応していきたい。



中川武夫所長



2日目に臨む参加者

●参加者の声●

- すべてにおいてシンプルでありながら、わかりやすい説明であった。
- 見やすいレジュメもあり、要点が明確で参考になりました。
- 建学の精神は普段使いするということ。
- 私学と公立の違いがよくわかった。
- 自転車の前輪と後輪の例え、同感である。
- 心が動かされた。内容をかみ砕いて本校の先生方に伝えたい。

◆意見交換会◆

● テーマ「建学の精神をどう具現化するか」

☆各グループ代表者による報告

第1グループ ☆報告者 佐伯友茂・米子松蔭高等学校校長（世話役 木内秀樹 次世代リーダー育成専門委員長）

建学の精神の現状は各学校で大きく異なり、それぞれの取組、悩みがあげられた。カトリック系学校の場合は教職員・生徒・保護者に信者が非常に少なく、宗教の精神をどう具現化し生徒に伝えていくのかという悩みがある。別のカトリック学校では男子校から共学化したことでむしろ宗教的な色合いが女子の生徒募集にかなり生きておりその辺りを深めていきたいとのことだ。今は自転車の前輪で頑張っていて、次は後輪を大きくして推進力を高めていこうという学校もあった。各学校は時代の移り変わりの中で、建学の精神が儒教的精神の難しい言葉で具体的に生徒たちに伝え難いため、練り直して具体的な言葉に変えて生徒・保護者に伝えていく工夫を実践している学校もあった。木内世話役からは学校100周年という大きな区切りの中で建学の精神から具体的な目標を立て、それを学校全体で教職員を中心に共有、実践し、生徒募集に生かすよう取り組んでいるという話が非常に参考になった。建学の精神に関する他校の先生方の話を聞き、非常に刺激を受けた。ここで答えが出るものではないので、皆が持ち帰り、学校でどう建学の精神を具現化して学校の発展につなげるか次回当部会に参加された時に発表して貰いたい。グローバル化教育への取組については、ネイティブ教員を雇い中高一貫校の中学校導入段階で多く取り入れ興味付けして高校で文法へつなげて実績をあげている学校もあった。文科省SGH認定3校からは生徒のコミュニケーション能力は高まったが、教員研修の中ではどの学校からも大きな実績が上がったとの報告はなかった。

第2グループ ☆報告者 田中満彦・広島国際学院高等学校教頭（世話役 山中幸平 次世代リーダー育成専門委員）

建学の精神についての各校の現状と取組について。建学の精神は宗教精神から成るものと実学的な所から来ているものの二つに大別される。工業・洋裁からスタートした学校の建学の精神を現時代に具現化する言葉の言い換えは難しいとの意見が多く出された。創立者の思いを言い換えて教員が生徒に伝えていく、社会が変わる中で学校教育にいろいろな改革を取り入れる、コース化、不登校に特化したコース設置など対応している学校もあった。宗教精神から成る建学の精神がある中で、紳士を育てる、地域のリーダーを育てる取り組みをしている。生徒の実績・学力向上の中で満足度をどういう風に捉えるか、何らかの付加価値は建学の精神から来るのではないか。建学の精神について教員の共通認識がないため再解釈することとし歴史を紐解いて実践している学校もあった。結論としては、それぞれの学校の教育実践に関する諸問題の背景にある建学の精神、教育理念がぶれないような対応をすることが大事ではないか。また、不登校生、成績下位者の家庭状況への対応については、不登校生に対して長い目で見て卒業するまで面倒を見る、個別事情に配慮し外部でカウンセリング契約し対応させる、クラスに散りばめずコースにまとめるケース等が示され、大変参考になった。

第3グループ ☆報告者 家氏宏育 兵庫県播磨高等学校教頭（世話役 徳野光博 次世代リーダー育成専門委員）

若手教員をはじめ全ての教員に建学の精神をいかに浸透させていくか。創立者縁の地フランスを高校2年生全員が訪れ、生徒が創立者の生活に触れてその思いを受け継ぐことで建学の精神をという素晴らしい取組を行っている学校があった。公立校の研修も近年非常に充実しており、私立学校でも体系的な研修の仕組みを作っていくべきとの意見も出された。建学の精神を受け継ぐことにつながる研修と同時に、建学の精神は心の感化でもあり、普段の仕事を進めつつ周りの先生方の言動等からじわりと伝わっていくことが大事で、先輩の先生方全体がそこに重点を置いて日々教育活動で取組んでいく大切さを感じた。一方で、建学の精神は建学当時から相当経っており、その時に創立者がそう思っていたのか、今この立場にいる自分がそれを変えていいのかという怖さがあり、自分が解釈してそれを示すことに大きなリスクを感じるとの意見もあった。本校でも日常使う言葉でなければ生徒に本当には伝わらないと痛感し、ビジョン・ミッションを変え改めるのではなく、行動指針を明確にしてそれを教員にしっかり実行して貫くことに取り組んでいる。行動指針を各教員がどのように具現化していったのか年一度まとめてフィードバックする取組を行う学校、「ロードスター(北極星)プラン」と称して一つの所を定めその目標に向かって皆で頑張るプランを実践している学校もあった。

第4グループ ☆報告者：菅原徹・藤女子中学高等学校校長（世話役 中川武夫 所長）

建学の精神、理念をどう伝えるか。リーダーは学校の建学精神、教育理念を持つ必要があると強く感じた。本校はカトリック校で、創立者はカトリック司教長、シスターが校長を務めていた。聖職者が作った建学の精神、理念を一教師から校長職に就いた信徒の私から私が伝えていくのはおこがましく難しいことだ。中川所長は仏教系学校で建学の精神を伝えるために自ら僧籍をとられており、そういった情熱がないと教育理念は伝えられない、自身が創立者の理念、建学の精神を学び直さなければならぬと改めて強く思った。所長報告では、建学の精神は守り続けるのではなく、新たに作り上げていくものという発想に触れ、例えば90年前の建学者がどういう時代の尺度で見ている、どういう子どもたちを育てようと考えたのか、そんな建学者の思いを現代の社会に引き込んで今の子どもたちを見つめる。そこから新たな建学の精神—全く違うものではなく原点は90年前の精神を時代に合わせて—を新たに創造していくことが大事ではないか。校訓など非常に古く分かりにくいものは生徒・教員にもわかりやすい言葉に置き換えていく必要がある。そ創立者の聖地を教員が訪ねる学校や教員よりも理解の早い生徒に期待する取り組みを行う学校もあった。年度当初の理事長・校長による訓話・所信表明や職員研修を継続的に行いながら、なかなか浸透はしないだろうが粘り強く語り続けることが大事だといった話も出された。各学校で教員に建学の理念をどういう風に伝えていくか苦慮されているということは共通だと感じた。

●参加者の声

- 限られた時間ではあったが、各校の事情を知ることが出来て良かった。
- 他校の現状、様々な意見を聞き、ヒントがたくさんあった。時間がもう少し欲しい。
- 同じグループの先生方が勤務されている学校の「建学の精神」を聞くことが出来て良かった。
- 各校の抱えている問題が提起され、それを共有することが出来た。
- 各校の現状を踏まえ総括的な話が出来た。
- 建学の精神を具現化していく具体策も勉強できて有り難かった。
- 多くの刺激が得られた。各グループの報告も勉強になった。



各グループ代表者による報告



白熱したグループ討議



木内秀樹専門委員長による研修会総括

◆ 閉会式 ◆

● 「総括」

木内 秀樹 一般財団法人日本私学教育研究所 次世代リーダー育成専門委員長

この二日間、いろいろな学校が集まって各校の事情や悩みをそれぞれの立場で受け止められたのは大事なことだ。皆さんの立場であればと生徒募集、受験生から選ばれる学校の指標が気になり、中川所長が言われた私学の進学実績等は直ぐに頭に浮かぶだろう。しかしその大本にあるのは、講演で實吉先生から「生徒にとって学校＝母港だ」、視察では工藤先生から「学校は生徒たちが帰ってくる故郷だ」と言われたことだ。これは私立学校では建学の精神に基づくさまざまな教育が行われており、生徒たちが自ら育った中学校や高等学校に愛校心を持っている証で、これこそがこれからも私学が生きていくことのできる最大の源ではないか。そのために参加の先生方がリーダーとして大きな学校の旗振り役となり、その下で生徒たちが学校の建学の精神を理解するのも大事なことだが、何よりもまず教職員がリーダーの下に一致して建学の精神、思いを共有していかないことには、私学らしさを取り戻せないのではないか。今回研修のメインプログラムは意見交換会であったが、聖光学院中学高等学校の視察は先生方にとって大きな刺激となっただろう。校舎が立派というだけでなく校舎に工藤先生の思いが込められている。工藤先生のトークにも私学のリーダーらしさを感じられたのではないか。今回当部会に参加されて得たものを生かして、それぞれの地域で学校が私学らしさを発揮して益々発展されるよう祈念すると共に、来年も参加して頂ければ幸いである。

◆ 要望・感想等（参考） ◆

- 充実したプログラムで、参加して良かった。来年も参加したい。
- 世話役の先生の話をもう少し聞きたかった。進行と世話役を兼務しても良いのではないか。
- 私学は、建学の精神を永久に伝えるということ。
- 多くの人たちと交流する貴重な機会を得ることが出来た。
- 特色ある学校への見学。
- 近藤先生・工藤先生の良い意味でリアルな話が大変勉強になった。経営のオフレコ的な話を今後も聞かせてほしい。
- 次年度も本年度のテーマをもう少し広げて（深めて）いって頂けると有り難い。
- 21世紀型の私学のあり方。
- 課題を持つ教員への対応。危機管理対応。
- 教員研修のあり方について。
- 開催地区を、関西及び、東北や九州地区等で実施する事は出来ないか。
- 今回九州地区からは7名参加であったが、福岡での開催であればもっと多くの方が参加できる。

◆ 都道府県別参加者数 ◆

都道府県名	参加者数	都道府県名	参加者数	都道府県名	参加者数
北海道	2	岐 阜	1	鳥 取	1
青 森	1	静 岡	2	広 島	3
新 潟	1	京 都	1	福 岡	2
埼 玉	1	大 阪	7	長 崎	2
神奈川	12	兵 庫	1	鹿児島	3
東 京	10	合計 16 都道府県・50 名			

次世代担うリーダー集め 建学の精神の具現化で研修

一般財団法人日本私学教育研究所（吉田晋理事長）富士見丘中学校高校理事長・校長（校長）は昨年11月7・8の両日、神奈川県横浜市の新横浜プリンスホテルを主会場に「私立学校専門研修会／次世代リーダー育成部会」を開催した。私立中学校高校の副校長や教頭ら約60人が参加した。今年度の研究のねらいは、私学の経営後継者にとって重要課題の「建学の精神をどう具現化するか」。参加者は講演や聖光学院中学高校（横浜市）視察、グループ討議等を通じてそれぞれ自校での具現化の在り様を考えた。

研修会初日、初めに主催者を代表しての挨拶、続いて講話を行った近藤長・校長が「私立学校の

彰郎・同研究所理事（次世代リーダーに望むこと）と題して講演した。雲学園中学校高校理事長・校長）は、私学団体役員としての経験を語り、当り前の中で私学の自主性が守られている訳ではないこと、そのためリーダーとなるべき人は学校の経営のことはもとより学校外と付き合い、議会関係者や行政関係者と付き合い、私学を理解してもらう努力が大事なことを力説。また、日頃の教育実践がどれだけ積み上げられているかが大事で、学校に入っている教員、生徒の雰囲気が大切で、学校の雰囲気は長年の蓄積でしか醸し出さない」と語った。

続いて、實吉幹夫・東京女子学園中学校高校理事長・校長が「私立学校の

次世代リーダーに望むこと」と題して講演した。實吉氏は、「教育のルールメーカー（ルールを作る側）になることは、我々私学経営者に課せられた大きな使命であり、経営者はプレーヤーである教員に優れた能力を発揮させる環境づくりを第一義的に考えなくてはならない」と語ったほか、リーダーシップについて

は、LEADERSHIPの文字を取り、愛する心、経験、行動力、運営能力、教育する力、創造する力、奉仕の心、健康な身体、斬新な発想、個性を兼ね備えている必要性を指摘。

また、「落伍者なき学校」で知られる米国の精神科医、ウィリアム・グラッサ博士の言葉を引用してボスとリーダーの違いについて、ボスは駆り立てるが、リーダーは導く、ボスは権威に頼るが、リーダーは協同に頼る、ボスは方法を知って

いるが、リーダーは方法を示す、などを紹介した。このほか教育は生産で福祉ではないこと、私立学校にはふれないところ、芯を作っておく必要があることなどを強調した。その後、参加者はバスに分乗して聖光学院中学校の新校舎を訪ね視察、最後に工藤誠一理事長・校長から新校舎にかいた熱い思いや地域への配慮などを聞き、意見交換が行われた。

2日目は初日と同じホテルでグループ討議等が行われた。



初日に行われた近藤理事の講演



聖光学院中高校で工藤校長から新校舎について説明を受ける参加者